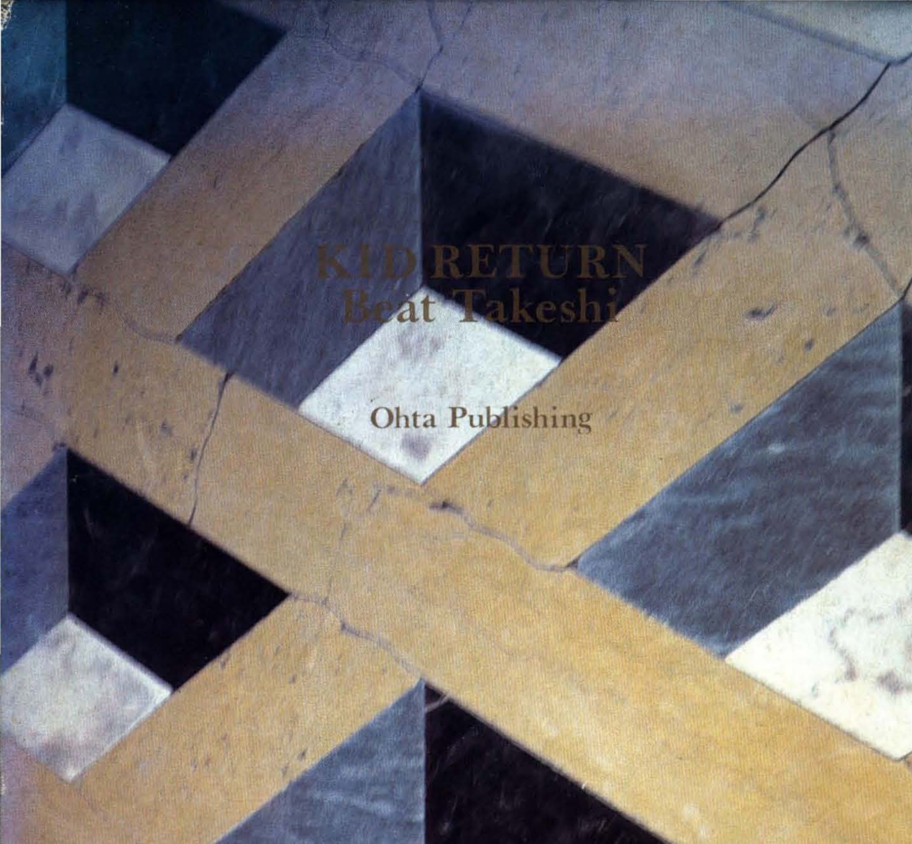


KID RETURN
Beat Takeshi

Ohta Publishing

永遠の少年たけしが贈るメッセージ詩集
無垢な悲しみと喜びをまだ覚えているひとへ

キッド リターン

（書き下ろし 全33編）

ビート たけし

キッドリターン

KID RETURN
Beat Takeshi

Ohta Publishing

ビートたけし

太田出版

KID RETURN

Beat Takeshi

PHOTOGRAPHER
MASAMI YOKOYAMA

ART DIRECTION & DESIGN
YASUHIKO TANIGUCHI

Printed in Japan

Ohta Publishing CO., Ltd



目次

6

生々流転

BIG　BANG（ビッグバン）以前の宇宙は何だったのか
カール・セーガンでもわからないから
宇宙はBIG　BANGからとりあえず始まることになっているが
草原に横になり、満天の星を見上げていると
虫の音が聞こえ、草も木も虫もオレも
素顔の宇宙と大きく交感し始める

この青い地球を作り、オレを作り、甲虫を作っている分子や原子は
遠くBIG　BANGの中から生まれたものだ
BIG　BANGの記憶を残す原子たちが
地球を作り、オレを作り、甲虫を作っている
素晴しい
オレの肉体を作る原子たちは
だから、縄文時代や石器時代の祖先のことを
つい最近の記憶として保存している



1

素晴しい
オレの肉体は、宇宙の進化と人類の進化が作り上げた記憶の結晶
宇宙創成期の燃えたぎるエネルギーがオレの中に息づき
火を発見した祖先の知恵が脈打っている
素晴しい
オレはオレだけで生きているのではない

自殺したやつは、それですべてが終わりだと思っているかも知れないが
そいつはバカだ
バカが死んだつもりになっているだけ
自分が死んだって
それは単なるひと区切り
借りてる家が倒れただけ
原子たちはオレを連れて別の所で生き続けるのだ
記憶も情念もしっかり生き続ける
だから、オレたちは絶対に死ねないし、死なないのだ
死ぬことも殺されることも借家が倒れるだけだから



8

人工心臓にすがる生き方をオレは選ばない
それはボロ家に突っかえ棒をするだけ
一度きれいに壊して、借家を建て直したほうがいい
ボロ屋に限ってくだらない補強をしているが、見苦しい
倒れた借家が草になり、虫になり、鳥になり、人になってはびこる
変転していく健康なリズム
それが宇宙のリズムなのだ

流れ星一つ山の端に消えていく
虫がすだき、樹々を渡る風がカサコソと葉音をたてる
天蓋を埋める星のきらめきを見つめていると
オレの心臓が宇宙のリズムと溶け合って行く
素晴しい
ふっと横を見ると
無数の霊と浮遊する原子たちが
オレといっしょに夜空を見上げていた

7

苦悩のビッグバン

「お前は変わり者だ」といわれ、団地の四階から身を投げた小学生がいる
生きているうちに教室で葬式をあげられ、駅の便所で首つり自殺した中学生がいる
失恋して所属事務所のビルから飛び降りた十八歳のアイドル歌手がいる
若いやつばかりでなく、中年も老年も、男も女も悩み苦しみ、あげくに自殺するやつがいる
金がないことや恋人がいないことに悩む
にきびや肥りすぎに苦しむ
学校でのいじめや会社でのいびりに悩むやつもいれば、挫折や苦悩のないことに悩むやつもいる
ある者にとっては
ヒゲが濃いか薄いかという些細なことが生きるべきか死ぬべきか
一生を賭けて解決したい悩みだったりする
人はいろいろなことを悩んでいるものだ
人それぞれ鼻の形が違うように
悩みの種類はじつに多様なものだ
悩み苦しむことは少しも間違っていない



10

正しいことだ
悩むことは自己の中心に向かってジャンジャン収縮していくことである
収縮を途中でやめる必要はないし
方向転換して逃げる必要もない
ジャンジャンジャンジャン収縮していけばいい
収縮する力は
宇宙の創成期における宇宙がはじき出される前の圧倒的な収縮力と同じもの
全宇宙が原子のサイズにまで収縮するパワーを自分で持てばいい
そうすれば
いずれ、はじける時がくる
それが君のビッグバン

加速度に加速をつけてジャンジャンジャンジャン収縮して
君がやがてビッグバンとなってはじける時
その爆発する宇宙は間違いなく君のものだ
君の悩みの質量は
やがて創られる宇宙の質量と相等しい

11

悩むことは少しも悪いことではない
気晴しなどすることはない
悩めば悩むほどいい　苦しめば苦しむほどいい
自殺などの方便を借りて収縮の方向を変えパワーを放散させてしまい
お茶を濁してはならない
悩むのなら徹底的に悩め
ジャンジャンジャンジャンジャン
質量を増せばいい
いずれはじける時がくる
はじけた君の宇宙は無限に拡がっていく
拡大し続ける無限の世界の中に身を投じて
もう一度、収縮するビッグバン以前の世界に戻って行くもよし
拡大する宇宙にそのまま乗って行くもよし
君は過去にも行けるし未来にも行ける
そんな自由を獲得したあとで
自分の本当の姿を見つめてみたらどうでしょうか
その時、君は

12

宇宙の旅人となるのだ

嘲笑

星を見るのが好きだ
星について考えるのが何より愉しい

百年前の人、千年前の人、一万年前の人、百万年前の人（？）
いろんな人が見た星と、我々が今見る星とほとんど変わりがない
それが愉しい

太古の昔から、人々が星について様々な意味付けや考察を続けてき
時には死人まで出してゴチャゴチャやってきたあらゆることを
ゆったり嘲笑うかのように
今夜も星は天空で輝いている
それが愉しい

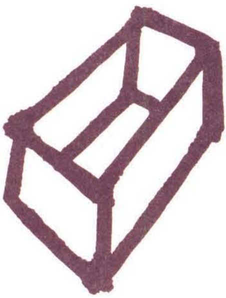
かつてあり、今あり、これからもあるだろう星たち
ロケットを飛ばし、衛星を打ち上げ

宇宙創成についての精緻な理論を展開する人間を
宇宙の星々は陽気に嘲笑っているようだ
「君たちの地球上で、たった十メートルの高さから落とした紙が、どこに落下するのかということさえ計算できないのに、数十億年前の出来事の計算など、よくやろうという気が起きたものだな」と人間の不遜さ、不様さ、不躾さを笑っている
少しも冷たさを感じさせない星々の笑い
それが愉しい

宇宙創成について一生懸命に研究する学者が
「今夜、職場の誰を誘って一杯飲みに行こうかな。それともひとりで飲むか」
などと悩んでいる面白さはたまらない
恐竜は何千万年生きて、いつ頃絶滅したかという問題を
何百万年も生きていない人間が必死になって考え抜き
肝臓ガンであっさり死んでしまう
このわけのわからなさ
それが何より愉しい

15

太陽系の果てまで探査機を飛ばせる人間が
隣近所の人たちの噂話に負けて一家心中してしまう
この奇妙さ
それが愉しい
今夜も星を見る

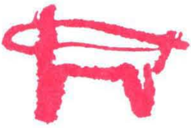




16

生きとし生ける者

「芝生、ゴメン」
クラブヘッドがターフをえぐり取る時
体の中に湧き上がる嫌な気持ち
人間の道楽や快楽のために
土に根付いた芝生を無理やりに
クラブの一振りで取ってしまうなんて
ゴメンゴメン
名もない野花の上にゴルフボールがある時は
せめて、花をよけてクラブを振ろう
てんとう虫もバッタもハコベもタンポポも
息するもの、根付くものみんなをいたわりたい
それらの生命あるすべてのものと
友達になるのが好きだし
いじめるのも好きだ



17

一日四十本のタバコを吸うのは
別にタバコが「いこいのひととき」だからじゃない
高原のきれいな空気を吸って
健康な肺で長生きしようとも思わない
ざまあ見やがれ、この体、って思いたい
自分の体は自分のものだから、体に振り回されたくはない
体のため、健康のため
なんていうのは体に振り回されているにすぎない
体にいいことが、必ずしも自分にいいわけじゃない
死にもの狂いでジョギングするやつは
自分のためではなく、先行した肉体にひきずり回されているだけ
だから、先行した肉体を止めるには
体に悪いことをしなければならないのだ

腕に蚊がとまった時、叩(たた)いて殺すか
フッと息を吹いて逃がしてやるか
フッと息を吹いてやる男になりたいと思うけど

18

思いっきり叩き潰して
「こんなに血を吸いやがって」
というのもいい
でも、今はなぜか、叩き潰したくはない
虫でも草でも、息をし根付くもの何でも
そいつらの生きている世界を
俺一人が、自分の快楽のために潰したくないと思う
いずれは誰か他のやつに潰されるのだろうが
それは確かなことだけれど
俺は、いま、潰したくない
そんな断を下すまい

オレの生き方

海に女の子と旅行に行ったとして、民宿とか海の家で食うラーメン代やコーラ代が気がかりだっていう生活もいいな

と一瞬、思うことがある

二人で冷し中華を食べちゃうと帰りの電車賃やバス代はどうしようか、だからラーメンにしようか、と悩む生活

そういう中での幸せというのもいいかも知れない

けれども、男にとっては、オレからすれば、そんな小さな幸せを絶対化したり正当化したりするのはダメだ、と思う

そこから早く抜け出して「ビシッとやるぞ」と思わない男は嫌いだね

「小さな幸せでもいいじゃないか」ってよくいうやつがいるけど小さな幸せなんて少しもよくないんだよ

幸せの基準がそれしかないから、一〇〇円二〇〇円で悩んで幸せだと思うんであって

一〇〇円二〇〇円で悩んでどこがいいんだよ

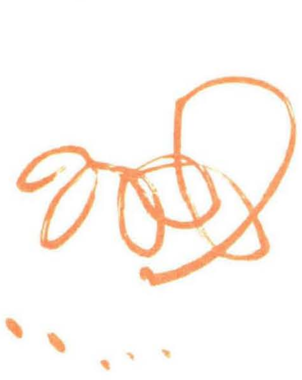
それはたんなるグラフィティ

そこから抜け出すためにのみあるにすぎない
小さな幸せを免罪符に使っちゃいけない
オレからすれば、努力していないだけのことだよ、それは
嫌な思い、みじめな思いをするのはいいんだけど、嫌な思いをしたら嫌な思いをしたなりに、やっぱり最終的にはいい思いをしたい
みじめな思いをひそかに愉しんだり、嫌な思い出だけで生きたくはない
オレも、昔は苦労したって思いがあるけれど、その思い出をひきずって生きているわけじゃなくて、それを断ち切るために貧乏もやったよ、といいたいね
両方とも知っていないといけないよ
小さな幸せも楽しかった、でも、オレはけっこう頑張ってよくなったよ、ってところがないと
「あの頃のまんま、今もそうだ」じゃ、やっぱりまずい

滅びていく芸人たち、だね
芸人さんは、やっぱり売れなくて自殺していったり、アル中で死んでいったりする



要は売れないからなんだ
そういうの、ちっともいいと思わない
確かにロマンはあるけどさ、ロマンだけじゃ、やっぱりだめだよ
浅草の芸人はやっぱり破滅型が多くてさ、オレもさんざん教え込まれた
けど、やっぱり嫌だった
破滅なんてのは、いつでもできるもの
努力することなしに破滅に行っちゃうやつが、一番悲惨だよ
自分のロマンだけに満足して引っ込んじゃいけない、と思う
日本人は破滅型の芸人に対してとても温かい
アメリカじゃ、修業したやつがものすごく成功して登場すると、大拍手
になるのに、日本は「バカヤロー」だもん
芸人として落ちぶれて、くだらない飲み屋で野垂れ死にするやつに拍手
喝采するんだ、これが受けるんだね
日本人特有の破滅型の美学、なんてのがあるでしょ
滅びの美学
自分のレベルに成功者を引きずり下ろして安心する　自分たちのお仲間
にして喜んでいる



アメリカでなら、アメリカンドリームの具体例って感じだから、「夢を見せてくれてありがとう」となるでしょ

どっちかっていうと、オレは日本人的な感覚が強かったけど、最近は「嫌だなあ、違うなあ」と思うようになった

アメリカナイズされてるわけじゃないけど、いろいろ体験してきてさ、成功したやつの方がいいんじゃないの、っていうのがあるね

根本的にはオレもジャパニーズだけど、文化とか生き方とかについて、もともとの日本人の感覚を越えたいと思うもの

素晴しいことっていうのは、破滅型とは違うことだよ、きっと

今、オレが自殺したら、みんなすごく喜ぶ、きっと

歴史に名前が残るかも知れない、でも、そんなことは嫌だ

この先売れなくても、落ちぶれても、自分の幸せの中で生きてやろう、と思う。ところが、日本人はそれを許さない

自殺の美学があるんだよ、しっかりと　龍之介でも太宰でも三島でも、みんなそれ、日本文化の象徴だもん

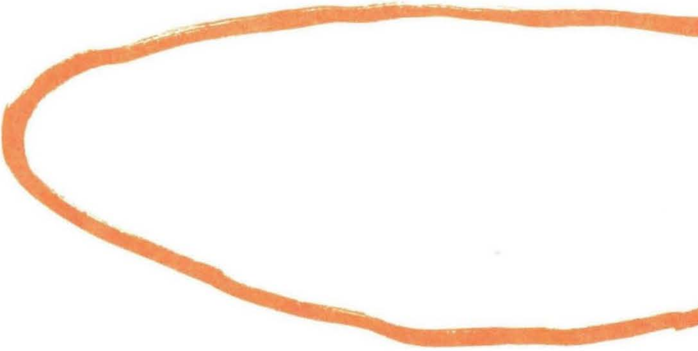
あの人たちの世代にとっては崇高なことかも知れないが、オレは違う

一つのことをずっとやってきて、もう現役はいいだろうということにな



23

り、自殺することなく、過去を振り返って、「ああ、あんなこともあったな」っていうのもいいな、枯れた男ね
「あの人は昔、売れた慢才師でね」
なんて他人からいわれ
「最近は何もしないで遊んでいるだけらしいけど」
と近所の人からいわれたりね、それが堕落だとは思わないだって、一時期は、心身を擦り減らして生きてきたんだから、その程度のことは許されていいね
ところが、今の世の中じゃ、許してくれないだろうな

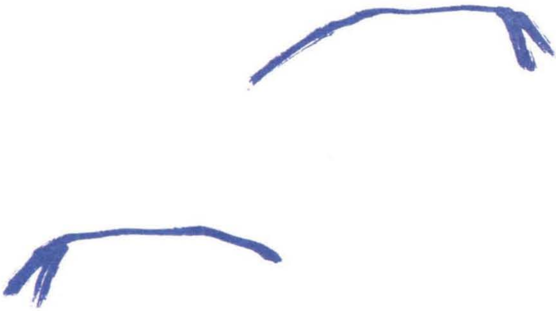


24

おしゃれ小鉢

「僕には将来の大きな目標と夢があるんだ」
女を口説くために夢を語るやつがいて
情欲のストレートな発散でそういうだけで
夢を実現する気力も能力もさらさらなく
夢を夢見ている
悲しいヤングマン

女は男のどこに惚(は)れるんだろう
夢見る純真な姿に惚れるのか
あるいは、仕事の実績に惚れるのか
それとも、見た目のよさに惚れるのか
わからない
見た目の悪いやつは夢で引っ張ろうとするだろう
夢もなく、見た目も悪いやつは、仕事の実績で引っ張ろうとするだろう
そして、その実績もないやつは……



何で女を引っ張ってもいいけれど
オレは仕事で引っ張るぞ
見た目とか、生まれとかではなく、あくまで二次的なもので女の気持ちを引っ張っていく
だから、オレにとっては女は二次的なもの
要は、大きな仕事をやれば女はついてくる
やっぱり女はおまけじゃないか
女はおしゃれ小鉢
初めからおしゃれ小鉢を買うやつなんていないに決まっている
いきなりおしゃれ小鉢を買ってしまえば
それはもうおしゃれ小鉢じゃなくなってしまうもの
付き合い始めた最初から
この女のために生きていく、なんていっちゃうと
やっぱり、おしゃれ小鉢をいきなり買うことになる
そうじゃないか、悲しいヤングマン
ガンガン一途（いちず）に仕事をやってきて



26

そのおまけにおしゃれ小鉢が届いた時にさ
その小鉢に真剣になる、っていうのがいい
それがオレの憧れ
仕事のほうが大事で女に本気になれなかった
女のために死のうと思ったことがなかった
女のために仕事をあきらめたことがなかった
そんなオレとは反対に
女に真剣だったやつは仕事ができなかったんじゃないか
二兎を追う者は一兎をも得ず、か
青春を純粋に生きよ、とよくいうが
恋愛だけが純粋ではなく、仕事にかける情熱もまた純粋であるはずだ
女のために仕事を捨てたのが格好よく
仕事のため女を捨てたのが格好悪いなんて
誰にもいわせない
そうじゃないか、悲しいヤングマン

女を包み込むような恋がいい

27

一対一の真剣勝負でぶつかり合う恋もあるけれど
それはやっぱりつらいだろう
オレ、歳(とし)をとったんだろうな
だからなおさら、素敵なおしゃれ小鉢に憧れる
女がくるのを三時間も四時間も待つ男は、きっと女に賭けているのだろう
仕事を捨てているのだろう
仕事に賭けていながら、女を三時間でも四時間でも待つのもいいじゃないか、っていう気
分で余裕をもって恋することが本当の恋ではないのかな

余裕で手にしたおしゃれ小鉢を
一生懸命に愛することがおしゃれじゃないかな
余裕がないのに一気にやると
時計や車をローンで買うのと同じになる
恋をローンで買ってどうするんだ
オイ、悲しいヤングマン

28

つらい関係

「もっと素敵になってね」とか
「どんどん出世していってね」とか
男をせっつく女はいても、自分も伸びていこうとする女は少ない
男を励ますばかりだから、結果的には男からどんどん差をつけられるはめになるのだ
男も上げて、自分も自力で上がって行こうとはしないんだよ
たいていの女って
だから、女が捨てられる
ふたりが出会った最初の頃は、同じ地点にいるわけだから
「もっと売れて、もっと上がっていってね」
という言葉に力があったけれど
女が上がっていく努力をせず、その逃げ口上になってしまった時から空しいものになる
心の片隅で、努力せず、励まし続けているのが、女としていい生き方なのだと思ってい
るのだろうが
それは勘違いだ　怠慢なんだ
じっと待っていればそれでよし、という安易さがあるんだ、きっと

27

男をせっつけるのはすぐそばにいるから
手をのばせば届くところにいるからだ
男がずっと上がってしまったのに
女が前と同じ位置でせっついても手が届かない
男を励ましてもっと上げてやろうと思ったら
男のすぐ下にいなければいけないはずだ
男が上がったら、女も上がっていく
そんなセンスを持った女がいてほしい

男を一度はせっついて、結果、男が上がり女は相変らず同じ位置でせっつき続けるから
男にすればひどく疲れるんだよ、これが

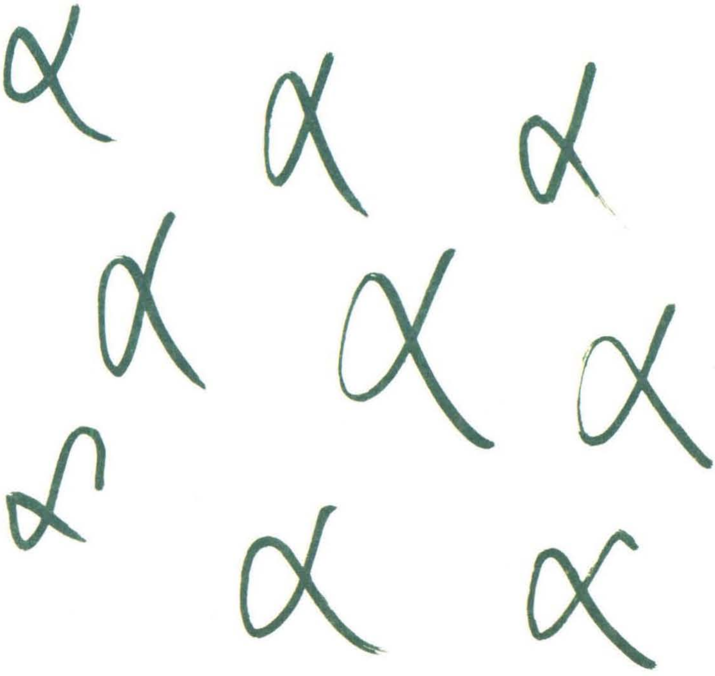
女もつらいだろうが、男もつらい
なかには、ちゃんと手が届いた頃が懐かしいってんで
上がっていった男に、自分のところに下がってこいっていう女がいる
男の引きずり落としだね、これは

一度、男を励ますことは誰でもできる



30

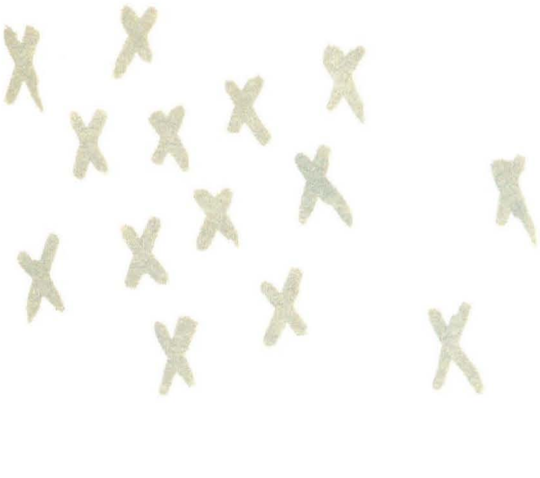
二度、三度と男をちゃんと励ませられる女はやっぱり少ない
何度でも励まし合える男と女って、いいね
口先だけで「跳べ、跳べ」というのは簡単だ
そのくせ、跳んだ男に対して女の腰はいつも引かれている
バラストになった女ってつらい
「あんたに負けないいいい女になってやる」
そういった女はあまりいないんだ
本当はそれが何よりもの励ましの言葉なのにさ



31

南無阿彌陀仏

浅草の師匠連中はよくいっていたものだ
「十年下積みで苦労したやつは、売れてから十年もつ。下積みは貯金だから」とか
「早く出たら早く出ただけ飽きられるのも早いから」とか
だからといって
貯金ばっかりやっていて潰(つぶ)れる会社があるように
下積みばかり死ぬまでやっているやつがいないわけでない
むしろそんな芸人のほうが多いのだ
自分の不幸を社会のせいにするのが芸人だから
自分が売れなくても自分のせいだとは誰(だれ)もいわない
本当は、実力がなく、才能もないことを
薄々、自分もみんなも知っているのに
それをいっちゃおしまいだから
売れない芸人が集まって、安い酒場で大酒を飲み
「来年は、オレ、勝負！」
「オレも勝負よ」



32

「来年売れなかったらもう辞めちゃうよ、この稼業」
って大声でいい合っているんだけれど
それを毎年繰り返してばかりいる
自分に対する圧倒的な思い込みだけで生きているのが芸人だから
そのタガがゆるむとボロボロになっちまう
芸人は生涯、死ぬまで自分の芸に見栄でもいい嘘でもいいから
誇りを持ち続けているものなのだ

下積みのまま年老いた芸人が
「若い頃はバンバンやってさ、やりすぎたんだろうね、世間の目がまるっきりなかったんだよ」
と、酔ってオダをあげる
本当は、才能がなかっただけのこと
芸人の才能は客が決める訳だから
世間が認めないことは才能のないこと
売れなければ負け
自分の才能が先走るってことはありえないのだ



だから、身の不幸をいつも世間のせいにしてしまう
そういい張る
嘘の自信でもいいから、自分だけしか信じていない自信でもいいから
それを頼りに下積み芸人を死ぬまで続けて行く
逆にさ、ある程度ワァーっと売れた芸人は自分に自信がないものなんだ
「アッ、ダメだよ、こんな才能じゃダメだ、どうしよう」
って自分を追い込んでいく、だから売れる
頭いいやつほどバカに気がつく
でも、売れることなく、年老いて貧乏で
それでも自分を信じてる芸人に
一言いってあげたい
「兄さんの時代が違っていたんだよ、生きる時代がさ」と
オレも相手もそれが嘘だってこと、薄々気がついていてもいいんだ
「世間のほうが悪かった」と思い続けて死んで行く、生涯下積みでしかなかった芸人に
「ジイちゃん、時代が違うんだよ」
そういえばさ、オレもジイさんも
とにかく芸人として一生を全うしたことになるじゃない

34

「時代が違うんだ」って言葉は芸人にとっての南無阿弥陀仏だな

35

笑われる悲しみ

お笑い芸人ではあるけれど
他人からむやみに笑われたくないオレ
一目見て笑われてしまうおかしな顔でないし
それほど不細工じゃないだろ、オレの顔
ただ、ちょっと猫背でガニ股（また）だけど
こんな格好の日本人ならどこにでもいるだろう
それなのに、オレの顔や格好を指さして笑うやつがいる
笑われたくないぜ
オレは大きなガリバーでもなければ小さな小人でもない
ただのお笑い芸人だ
お笑いは好きだけど笑われるのは許せない

他人を指さして笑っても許されるやつは
さんざん他人から指さされて笑われてきたやつだ
笑われる悲しさをたっぷり味わっているやつなら

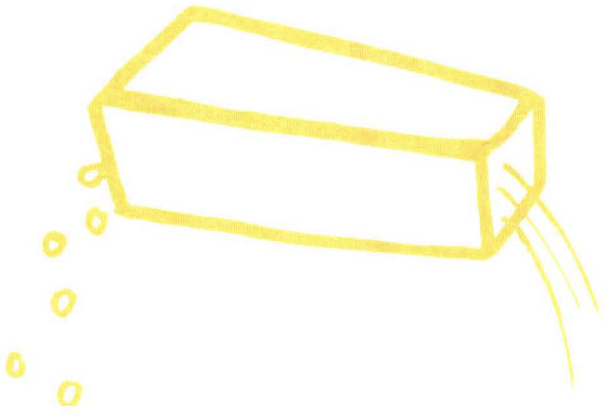
他人を指さして笑うがいい
見すぼらしい格好を笑われ、でき損ないの顔を笑われ
鉢の開いた頭とかひどい絶壁の後頭部とかを笑われてきたやつなら他人を笑ってもいい
けれど
かつて指さされたり笑われたりした経験のないやつは
他人を指さして笑うもんじゃない
さんざん他人に笑われてきたオレだから
どんどん他人を指さして笑ってやるんだ
お笑い芸人のオレだから

37

浅草キッド

お前と会った　仲見世の
煮込みしかない　くじら屋で
夢を語った　チューハイの
泡にはじけた　約束は
灯の消えた　浅草の
コタツ一つの　アパートで

同じ背広を　初めて買って
同じ形の　蝶タイ作り
同じ靴まで　買う金は無く
いつも　笑いのネタにした
いつか売れると　信じてた
客が二人の　演芸場で
夢をたくした一〇〇円を
投げて真面目に　拝んでる



顔にうかんだ　おさなごの
むくな心に　またほれて

一人たずねた　アパートで
グラスかたむけ　なつかしむ
そんな時代も　あったねと
笑う背中が　ゆれている

夢はすてたと　言わないで
他にあてなき　二人なのに

31

芸人であるかぎり
オレの一番のファンは自分自身
理屈でも何でもない　心意気だ
テレビに映る自分を見て
「おい、よく演ってるね」
と自分で声を掛ける心意気
それがなければ、自分のやることが
すぐに詰まらなくなってしまうもの

遊びでゴルフをやっている時も
「ずい分凝ってるねえ、アンタ」
って声を自分で掛けるからね
それで自問自答が始まって
「まあ、そうなんだ、最近さ」
「そんなにゴルフに入れ込んじゃって、いったいどうしたの、大将」

「いやあ、下手だからさ、ゴルフ。腹が立って仕方なくって、それでついね」
なんてことひとりでやってる
女の子に取り囲まれたりすると
オレの一番のファンが目ざとくいってくれるのだ
「よう、日本一。もててるねえ」
「そう、ちょっと、もててるねえ」

一番のファンが自分だから
一番の批判者も自分でないとつじつまが合わない
ゴルフをやっていると、すぐにいわれるんだ
「昼間っから、そんなに遊んでばかりで仕事はどうしたんだい、オイ」
「ハイ、明日は仕事やりますから。根性決めて、笑いをとりますから」
だから、ゴルフやってても、ファンと批判者がブツブツいい合って
うるさくって仕方がない
「いいねえ、売れてる芸人が遊んでいる姿って」
「何いってるんだ、そんなこといってると明日にゃドサだよ、ドサ、覚悟してんのかい」



41

「遊びも芸の肥(こや)しだよ」
「それがヒイキのヒキ倒しっていうんだ」
うるさいんだよ、ふたりとも

でもね
「待ってました、千両役者!」
って声のあとに
「このクズ、引っ込め!」
って言葉を自分自身に掛け続けていなくっちゃね
芸人に限ったことじゃない
生きてる者誰(だれ)しも、男も女もみんな
ふたりの自分を自分の中に飼っておきたいね



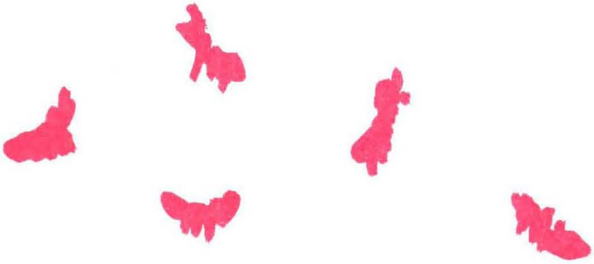
対話

コンサートが終わって、もう一歩も歩けない、立っていられないって状態の時に
精神は限りなく高揚していて、体のことはおかまいなしに、街に飛び出して行こうとする
精神「さあー、パアーッと一杯行くぞ。今夜は徹夜でガンガンやろう」
肉体（からだ）「あのう、せっかくですが、とっても疲れてますからすぐに寝たいんですけど」
精神「あ、そうなの。そうなら、お前はいいや、来なくていいから寝てろ」
精神がひとりで飛び出して行こうとするから
肉体「そ、そんな。同じ自分なんですからそんなに冷たくしなくてもいいじゃないですか。
私はあなたのためを思っていっているんです」
精神「うるせい。オレはとにかく遊んでくるからな」
って飛び出して、散々遊んでから、夜明け頃になって体のところに帰ってくる
「あーあ、疲れた。何だよ、お前、先に寝てたのかよ」
こんなやりとりが始終ある
仕事やっている最中でも
精神「もっとバンバン行こうぜ。やろうじゃない」
肉体「無理することないですよ。体が大切だから。体があってのことでしょ」

43

精神「いいじゃない、体なんか振っ切っちゃって」
肉体「ボクが体を振っ切ってどうするの。自分がやってられないですよ」
精神「そんな邪魔なもの置いていっちゃえ」
肉体「置いていくわけにはいかないですよ」
精神「バカヤロー、オレは体なんか捨てちゃうよ、お前。自分のためだもん、お前のこと
なんか知らないからな。体がついてこないんならこなくていいんだから」

よく他人から「疲れてるんでしょう」っていわれるけれど
そんなこといわれるまでもない
疲れてるよ!!　だからどうしたんだい



44

犬

夜中の道をひとりで歩いていたら
向こうからウロウロ犬が来た
ケンタッキーフライドチキンを食べていたオレの口元を犬が見る
キョロキョロ目を動かしながらも、トリのカラ揚げにしっかりガンを付けている
「このヤロー、見たな」
って思っていると、犬のヤツ、急に狭い露路に曲っていった
「何だ、こいつ」
で、犬が姿を消したあたりに
フライドチキンの食べカスをポトッと捨てた
すると、その音で犬がこちらを振り返り、フライドチキンを見たが
オレと目が合うと、サッサと歩き去って行く
しばらく歩いて、オレが何気なく振り返ると
犬が露路から顔を出して、オレを見ていた
そして、あわてて目をそらし、夜空を眺めるポーズを作っている
「ポチ、中に人が入ってるな

ポチ、誰なんだ、お前の中に入っているのは」



46

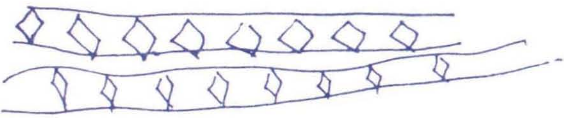
向日葵

ひまわりは、人の生き死にに深く関わる花
土埃と太陽がしみついた花の下に
激しく生きて殺された淫乱な女が埋められている
コツコツ働き続けた農夫が横たわっている
どこまでも続くひまわり畑には
シーラカンスと三葉虫がうごめき
太古の精気を絶えることなく送り続けている

太陽の軌道の中心に一本のひまわりが咲いている
根元を指でほじくって見ると
長い根がやわらかく湿った土の中に深く伸び
一番長い白い根の先端が、水平に横たわった男の胸倉に達している
殺された青年の背広に一つの光る種子の殻
死ぬことの予感に震えていた青年に
誰かがそっとつけてあげたに違いない



永遠を生きるための徴しとして
ひまわりが咲いている
今年もまた何人もの男と女が殺されたのだ



我々はビー玉である

少年は作られたばかりのガラス玉
透明で無垢、光輝で鋭利
しかし、一日一日、大人になるにつれ
小さな傷を負って行く
数えられないほど多くの傷を
やがてガスビーのように傷つき、淡い光しか発せなくなる
大人になることは、濁りと丸み、汚れと狡さ
決してそんなことがいいとはいわないけれど
何十年も傷一つできなかったビー玉に大きな傷を入れて割ってしまうより
小さな傷を無数に負って淡い光を発することのほうがいいのではないか

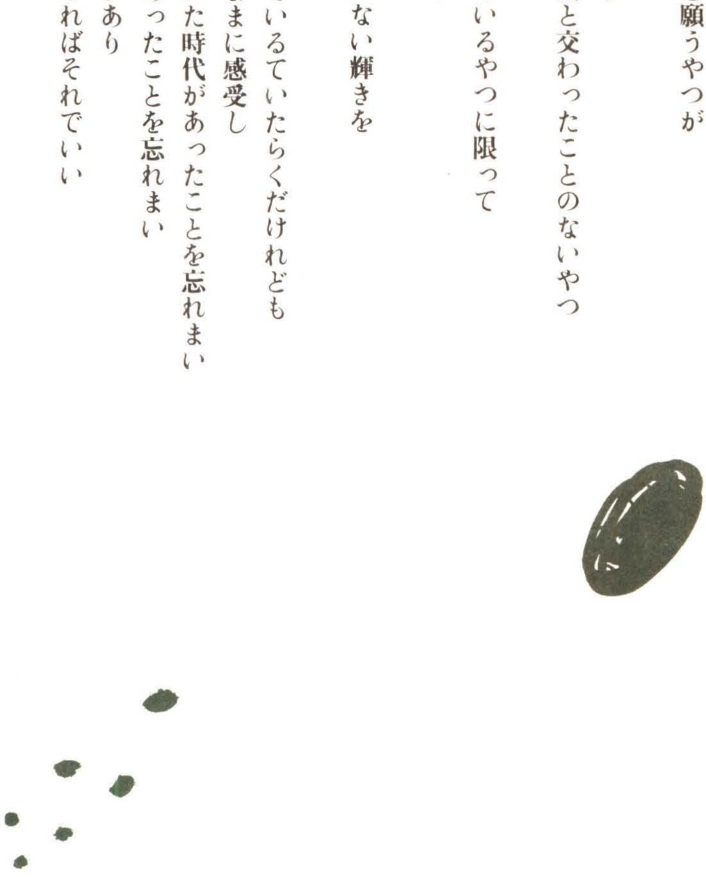
少しも傷のない生まれたばかりのビー玉であり続けることが
素晴しいことに間違いないけれど
澄み切った少年であり続けるのは
天才的才能の持ち主か世捨て人にしかできないことだ

49

一日一日、いろいろなものにぶち当たって生きていく我々に
小さな傷は必ずできる
かすり傷一つ負わないやつは
よほど偏屈者か図々しいやつか
ダイヤモンドのように優れたやつ
所詮(しょせん)、我々はビー玉である
ありふれたビー玉のくせして
傷つかないようにしたり、人生にもまれないようにしたり
純粋なままで生きたいなどと抜かすやつは
とんでもない詐欺師か、とんでもなくイケ図々しいやつだ
ダイヤモンドでないくせに
自分が無傷であることを願うのは
それ自体悪いことではないけれど
しかし、自分を無傷の状態に保つために
いかに多くの人を傷つけていることか
それをわきまえない振る舞いだ

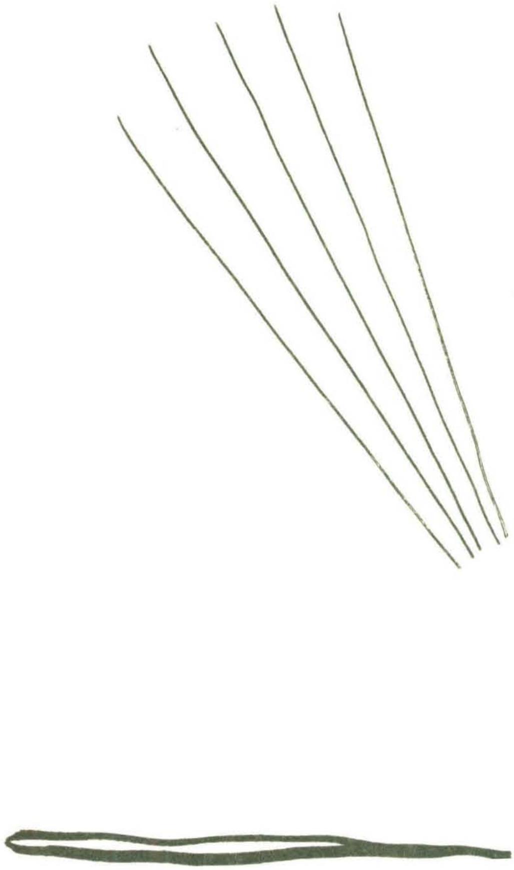
50

柄にもなく無垢なガラス玉でありたいと願うやつが
一度でも傷を負う立場に立つと
とり返しのできない深手を負ってしまう
一度も傷を負わないやつは、一度も他人と交わったことのないやつ
「私は汚いことが大嫌いだ」とか
「不純なことは絶対許さない」とかいっているやつに限って
意外にロクなもんではないんじゃないか
ただ、所詮、ビー玉の我々だけれども
少年時代に見た世界の　ガスに曇っていない輝きを
いつまでも忘れたくはない
汚れた大人の世界を濁った光の中で見ているていたらくだけれども
かつてはオレも、外からの光をあるがままに感受し
周りのものを輪郭そのままに見つめていた時代があったことを忘れまい
悲しみが悲しみであり、喜びが喜びであったことを忘れまい
光を純粋に受けとめて輝いていた時代があり
それが不純になってきた道程を忘れなければそれでいい
忘れるはずがない



51

傷ひとつないガラスで見た世界を
我々はビー玉なのだから



52

ゼロの男

「手前らの幸せを見るためにオレは生きてきたわけじゃない」
という言葉を最後にくたばって行く男
その男の上を何人もの女が通り過ぎて行き、通り過ぎるたびに
「しょうがない人ね、あんたって人は」
といわれ続け、女は他の男とくっついて行った
そして、くっついたふたりは、いつも無言のうちに語っている
「あの人はかわいそうな人なのよ。それに比べれば私たち、幸せ」
バカヤロー、オレをオモチャにしやがって
自分たちの幸せの基準にオレを使うんじゃない
女たちは日々にいったものだ
「あんたに比べると、今度の彼はすごくやさしいの」
「あんたのほうがお金はたしかにあるけれど、彼のほうが誠実よ、ずっと」
「あんたに会うのが私の運命だったわ。でも別れることもやっぱり運命だったのよ」
「いつまでも、いつまでも私、待ちます。決して邪魔になりません。安心して」
「一晩だけでいいから、いっしょにいてください。私の一生の記念として」

53

「あなたに会って初めて男というものを知らされたわ」
しかし、結局、誰一人としてオレのもとに女は残らなかった
そして、全部の女がオレを基準にして、新しい男を見つけて行ったのだ
なぜかといえば、オレはゼロの男だったから
何もない、比べられるだけの男だったから
掛けるとすべてがゼロになる
ただ、「バカヤロー、オレはお前たちの基準なんかじゃ、絶対になかったぜ」という
言葉だけを残して朽ち果てていく
それがゼロの男

54

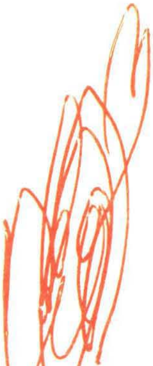
肉の棒

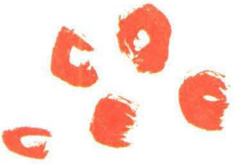
うれしいにつけ悲しいにつけ
ついついふくらんでしまうポコチンっていったい何なのだろう
不思議な肉の棒

父親の通夜の最中に明日のデートのことを考え
告別式のあと家に帰って
カミさんの上に平気で乗っかってしまうのも
みんな肉の棒の不思議

首つり自殺の死体になってまでポコチンふくらませているやつがいて
肉の棒のために人を殺してしまうやつや
女が死体でないとポコチンがふくらまないやつらがいっぱいいて
たまらないね　もう

どう逆立ちしても自分のものにならない女を見ても





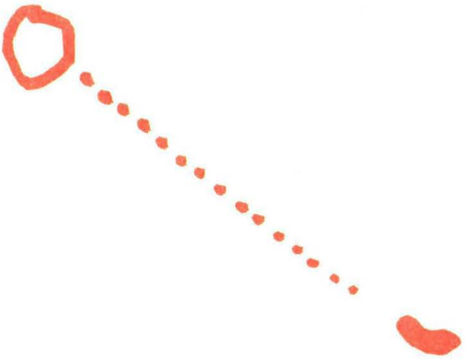
55

どんどん立ってしまうという凄さって
いったい何なのだろう
ポコチン　これ不可解

犯罪の親はポコチンだ
すべての犯罪は
ふくらんだポコチンを女の中に差し込むと快楽になるという公理から演繹される
外を歩いていて、女に差し込むのが挨拶がわりだったら別に問題はなく
そんなことをすると犯罪になるから
ポコチンの匂いは犯罪の匂い
大昔　男女の好き嫌いはあったのだろうか
ピテカントロプス・エレクトゥスに、美男と醜男、美女と醜女の区別があったのだろうか
あの男はマンモスを獲るのが上手いってことがモテる理由だったのか
「色男　金と力はなかりけり」か
今は、金を沢山稼ぐ男が必ずモテるって訳でもない
でも、大昔はマンモス狩りの上手いのが決め手だっただろう
だから、文化的なるものは

根源的には逃げの産物なんだ、きっと
要するに、世の中、金じゃない、とか
猛獣獲るのが上手いだけが男じゃないとか
いい出したやつって、モテないことを自己弁明したにすぎず
しかしその弁明がいつしか文化になってしまった
文化だなんて抜かしているやつに限って
肉の棒を使いたいのに使えないんだ
使いたいがために並べた理屈が文化なのだ
肉の棒が文化を生んだ
日陰者の弱者のうらなりポコチンが文化を生んだ

深夜　じっとポコチンを見る
お前のために親を裏切り
子どもも捨ててしまった
手前はいったい何者だ
オレの体にとりついた悪性腫瘍（しゅよう）かも知れない
ああ　肉の棒の悲しみよ



57

嫌（いや）なやつ

もの の裏がわからないやつ
常に世の中の流行（はや）りを追いかけて自分を無理やりその世界において
仲間に入ろうとするやつ
自分がものごとを責任もって最後までやることのないやつ
評論家のようなやつ
他人の尻馬に乗っていつのまにかわがもの顔をしてしまうやつ
これだけは許せないというものがないやつ
これだけはやってやるっていうことを持っていないやつ
親を許せないやつ
ひっそりと涙することができないやつ
ひっそりと微笑むことのできないやつ
正直さを売り物にするやつ
酒を飲めないやつ
食いもの自慢をするやつ
苦労を知らないやつと苦労を売り物にするやつ

58

女との約束をすっぽかして男友達と遊びに行けないやつ
何かというとすぐに教えたがるやつと教えてもらいたがるやつ
夢を持っていないやつ
喧嘩（けんか）の怖さを知らないくせに喧嘩をしたがるやつと一度も喧嘩をしたことのないやつ
この世が金の世であることを認めないやつ
「堕落」という言葉が好きなやつ
自分の顔が嫌いなやつ
お前ら、みんな死んでしまえ
死なないのなら殺してやろうか
もちろん、たけし
お前もだ

57

オヤジ

これという才能もないのに出世しようとあくせく働いてもダメで
所詮、たいして色男でもないくせにいい女に岡惚れして
まるっきり相手にされなかった
ろくな甲斐性もないから
偶然飲み屋で知り合った女とくっついてそれを恋と間違えて
愛だとか運命だとか思い込んでみた
たんなる肉体の衝動で子供が生まれ
それが夫婦のあかしだと信じたり
この世の幸せだと思ったり
妻が生涯の伴侶だと考えてみたりした
子供の笑顔ひとつで一生懸命に働き
子供の寝顔ひとつで小遣いを節約し
子供の将来に大きすぎる期待をかけ
息子は自分がなれなかったプロ野球の選手にしたいと鍛え
娘は宝塚のスターにしたいと習い事をいくつもさせ



しかし、子供にこれといって才能がないのがわかって
思いっきり不毛の現実に引き戻され
やっぱり血を分けた子供だと寒々しい納得をしたものだ
やがて、子供が成人する頃になると
自分ひとりがはっきり除け者だと気付き
嫁や婿に精一杯のお愛想をつかい
それが嫌さにやたら酒を飲んで
「酒にだらしがない」
と面と向かっていわれ
孫ができると、自分はまだ若いと思っているのに誰からも
「オジイちゃん、オジイちゃん」
と呼ばれてしまう
ついには、妻と子供たちにわずかばかりの財産と保険金を残し
最後の息を引きとった時に
家族みんなにホッとされて
間抜けな戒名をつけられて白けた葬式をされ
嘘ばっかりの弔辞と親族挨拶をもらい



61

何の感情もない人たちに囲まれて焼かれて骨になり
おまけに松竹梅のうち一番安い骨壺をあてがわれ
最後に長い箸でのどの骨をつままれて
さびしく
「コトッ」
という間抜けな音とともに骨壺に落とされる
その音だけしかこの世に残せない
そんなおやじさんは
やっぱりいいなあ



母の日

人間、ただ偶然に生まれてきただけじゃない
とびきり運がよくて生まれてきたのだ
母親のおかげじゃない
父親なんかのおかげじゃ、ましてない
母や父に感謝することは少しもない
運がよかっただけなのだ
敵は目の前にいるんだよ、おまえ
おまえを殺そうとしたのだが
妊娠六か月にもなっていて
さすがの欲深な医者も堕(おろ)せなかった
おまえの兄弟を二人ほど殺していた母親は
ちょっと油断していたんだ
だからおまえはそのスキをついて助かっただけ、運のいいやつだ
おまえのあとにまたひとり殺しているんだからな、母親は
敵に向かって感謝するようなバカがどこにいる



運がいいからといってお人好しになってどうする
おまえはまだまだ甘い
根性のあるやつはピルを右手にしっかり握って生まれてくる
額にリングをペッタリつけて生まれてくる強運なのがいる
さらには、コンドームをすっぽりかぶって生まれてきたインド人がいるそうだ
おまえはまだまだ甘い
親子の始まりには殺人があったのだが
しかし
子どもを殺す母はとても人間的な人なのだよ

神様

恐れながら、ひとつお願いがありますので、以下申し上げます
申し訳ありませんが、何とかお答えをよろしくお頼み申します
神様っていうと、とにかくいろいろありまして
日本にもいっぱいいらっしゃるし、ヨーロッパにもアラブにもいろいろいらっしゃるし
アフリカには部族の数ほどいらっしゃるっていうし
何でこんなに沢山いらっしゃるのか見当もつきませんが
そろそろ統一する神様が出てきてくれてもいいのではないでしょうか
もちろん、知っておりますよ、あなたがいらっしゃるのは
でも、もうそろそろ私どもの目の前に降りて来て下さってもいいのではないでしょうか
いえ、滅相も御座居ません
要求しているのではなく、お願いしているのです
地球にこれほどいやなことが沢山あって
私どもが悩んだり、人を殺したりして、地球が破滅しようかって段になっても
まだお姿が現れないっていうのは
あなた様は、やっぱり私ども人間をくずだと思っているんでしょうか

15

くずならくずで結構ですから
絶滅させるか、助けるか、はっきりさせてくれませんか
もうその答えを出すべき臨界点に来ているのではないでしょうか

アフリカで餓死者や難民を出させていますが
人間に感情を植えつけた神様なら、いっそのこと、無感情の感情にしておいてくれれば
よかったのに
餓死者に心を痛めたり涙したりする感情を
植えつけるだけ植えつけておいて
少しも救ってくれることをしないというのは
ちょっと片手落ちなんじゃないでしょうか
餓死者や難民やボートピープルを私たちに見せておいて
何をさせようというのですか
我々の力ではどうしようもないことはわかっているじゃありませんか
ボランティアとかエイドとか、そんなものが何のためにもならないことは、私たちにも
わかっているのですから
米ソ二大国の対立があり、とてつもない量の核兵器があり

66

その上で私たちに何をやらせたいのですか、神様は？
私たち人間に自力での解決を求めるくらいなら
最初から「神はいない」とおっしゃってくれればいいのにと思われてなりません
それでいて、やたらに沢山の神様が世界中にいらっしゃって
あの神様たちはいったい何者なんですか
本当の神様が誰なのか、決めていただけないもんでしょうか
そして、もしも、破滅することが私たちの究極の姿だったら
すみませんが、今すぐにやってもらえないものでしょうか
私たちは、もう誰が何をやってもダメだということを
みんながみんな、よーく承知しているのですから
ひとつあっさりとお願い致します

ついでに申し上げますが
私たちの目の前で、人間がバタバタ死んでいっても
私たちはただ泣くしか仕方がないのでしょうか
これは何のための試練なのですか
試練に立ち向かうやつもいれば、スタスタ逃げるやつもいる

17

評論家もいればレポーターもいて
結局、人間がやると解決のないゴタゴタになるばかりです
勝手いってすみませんが、このようなゴチャゴチャした世の中を
神様はいつまでお続けになるつもりなのですか
あなた様がお姿を現して、大見得を切って下されば
すべて簡単に解決がつくのです
人類すべてがあなた様の御指示に従うのは目に見えているのですから

そこでひとつ御相談があるのですが
勝手なお願いで申し訳ありませんけれども
私どもの目の前で
自動車一台を二メートルほど空中に上げてもらえないでしょうか
でなかったら
地球の自転を一日でいいですから、逆回転させていただけないものでしょうか
そのどちらかをしていただければ、すべてがハッキリするはずです
そうしてもらえれば、地球上のあらゆる生物が
あなた様についていくことは間違いないのですから

18

神様

神様にすれば、それぐらいなさるのは
じつに簡単なことではないでしょうか
ひとつ、よろしくお願い申します











り

復讐するは我にあり

「――大統領は一言をも発さずにキーを回し、いよいよミニットマン発射の実行行為に入った。十六時三十六分二十八秒のことだった。十六時三十六分五十一秒、われわれはUHFを通じてミサイル群が発射されたことの確認を受けた。十六時三十七分七秒、シャイアン山より、サウス・ダコタ州のミサイル基地で、二十一発の核弾頭が爆発したという報告が入った。その後シャイアン山から通信はとだえた。ソ連の核弾頭は衛星から発射されたのだった。（中略）

　十六時四十一分十一秒、北米防空司令部から、カムチャッカ半島の前進ミサイル基地に配備されているSS―18が、サイロから発射されたと報告してきた。十六時四十二分四十秒、われわれは、敵の正確な目標設定とミサイル発射時刻を示すデータをパルス信号で受信した。ワシントン、サン・アントニオ、ニューヨーク、さらに……」

（『WAR DAY』W・ストリバー、J・W・クネトカ著　新潮社刊より）

核兵器を落とされたら
絶対に復讐してやる　生き残ってやる
放射線と死の灰を浴びようとも

核兵器を使ったお前らのことを決して忘れない
たとえ死んだとしても必ずお前らを呪い殺してやる

世界が戦略核兵器のバランスで成り立っているとか
世界が一発の水爆の使用で終わるとか
すでに米ソ両大国は世界中の人間を七回半もオーバーキルできる核兵器を保持するとか
ほざくんじゃない
たわごとを抜かすんじゃない
いいか、お前たち
たとえ我々の肉体が滅んだとしても
我々を抹殺しようとしたお前たちに絶対に復讐してやる
姿形が蒸発してしまっても
精霊となって呪い殺してやる　裁いてやる
頭上に落ちる五〇キロメガトンの水爆よりも
俺の復讐の刃のほうが強力だ
なぜなら
俺は地球に生まれたことを心から感謝しているのだから

世界は米ソ二大国に支配され
地球はもちろん宇宙空間までも
二大国の軋轢（あつれき）で終末を迎えるかもしれない
などという人がいるけれど
地球の全球面に何億メガトンの核兵器が降り注ごうとも
核兵器によって我々の世界と我々の肉体が形はたとえ滅んだとしても
必ず俺の魂はお前らを永遠に呪ってやる
いくらでも核兵器を落とせばいい
ＳＤＩでも何でも用意すればいい
何億人でも殺せばいい
地球上からあらゆる生物を抹殺すればいい
しかし
決して許さん





見せるものは闇（やみ）だけなのか

世界が見えない
どんな色もない
四囲（あたり）が見えない
愛する人の顔さえ見えない、と君はいう
しかし、本当の世界が見えている人が、この世に何人いるだろうか

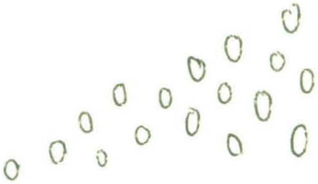
世界は目の前にあるものではない
全身で生き抜いて初めて世界が現れる
感覚器官の一つがダメになっても
ほかの器官とパワーで世界を獲得すればいい
視覚だけで世界が獲得できるわけがない
いままでに視覚に頼って視覚だけで判断して成功したヤツがいるだろうか
見えるものは闇（やみ）だけなのか
視覚を超える全身のパワーと感覚で



世界を生きてみよう
他人には絶対に判断できない色を生み出すことができるだろうし
世界で一番美しい恋人を作ることもできるだろう
もし
目の見えないことを軽蔑したり、敵視したり
うわべだけの同情を見せたりするヤツがいたら
視覚だけに頼って薄っぺらな自信を持って生きているヤツを
腹の底から嘲笑(あざわら)ってやれ
ヤツラには
君が持っている全身のパワーはない
だから
君たちがとても恵まれているとは、あくまでもいわないけれど
君には欠落を補ってあまりある力が備わっているはずだ
他人にひけ目を感じることもないし落ち込むこともない
ありとあらゆる体の能力をふり絞り、見えないはずの目の底から
世界を把(とら)えようとする集中力が光のようにほとばしり出る瞬間を
思い浮かべろ



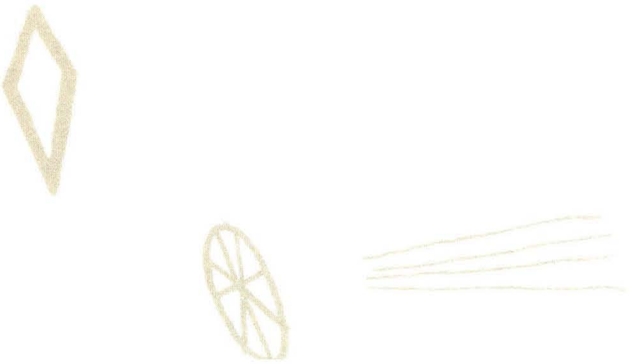
君たちこそ、逆に選ばれた人たちだ
オレはそう確信する
昼間も夜も暗闇もすべて君たちのものだ
どこにいても、どんな時でも
君たちは光速よりも早く移動できるし
完璧に無色の世界に、じっと閉じこもることもできる
拡張された知覚と精神の世界は
他の誰でもない君たちのものだ
君たちは、何よりもまず、選ばれた者だ
その拡張された世界を知覚できるのは、四十億の人類の中で、ほんの一握りの人たちなのだから
見えるものは闇だけなのか



75

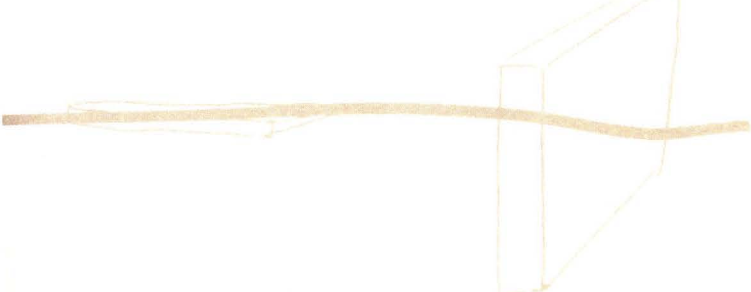
喧嘩しろ

「自分たちの民族は……」
といい始めた途端、述語が肯定であれ否定であれ
すでに差別が始まっていることを
君は承知しているか
「差別は許さん」
といい出せば、それもまた差別を再生産はしても
差別を消滅させない恐ろしさを
君はわきまえているか
差別なるものをこの世からなくそうとするなら
差別される者が下から上にではなく
上から見下して文句たれることに始まるだろう
「お前らより、俺たちのほうが優れている」
と、一般のやつらを高みから被差別の立場に追い込んでやれ
傷口をたよりに生きて行くのでなく
やつらから見上げられることによって



76

初めて〝勝負〟なのだ
マルクス主義者がダメなのは
「我々、抑圧され搾取された全世界の労働者は……」
って位置が低いことをはっきり認めてかかっている点にあるのだ
ブルジョワジーを始めから崇(あが)めていて、喧嘩(けんか)に勝てるはずがない
そうではないか、闘う労働者諸君!!
我々は差別にあえいでいる、とか
人から笑い者になっている、とか
我々は団結して闘おう、とか
そんなことをいっていると、いつまでたっても上に上がれない
差別とは、被害者が差別を下から告発することを
それ自体エネルギーにして増殖するシステムなのだ
告発ではなく、他を見下せ
半島の人も労働者も女性も
例えば、オレに向かって
「お前みたいなペンキ屋の伜(せがれ)、どこの血を引いているかわからねえ、クズだ」
っていって初めて勝負になるんだ



77

「オレがなんでお前らにバカにされなきゃいけないんだ。お前らただ血が濃いだけじゃないか」
オレがそう反論すると
「雑種の血よりも、純粋な血のほうが高貴に決まっているんだ、この万世一系の大和では」
こうしたやりとりがあって、とりあえず対等の場に立ち始める
差別を転倒させなければ、何も始まらない

終戦直後の闇市（やみいち）で、異邦人と日本人がドンハチやっていた時代のほうが
今よりも「平等」だったはずだ
真正面から、対等に喧嘩をしている時、差別はその影を薄くする
差別をなくそうと思うなら
まず、相手の悪口をハッキリ口にすることだ
「何をバカいってやがんだ、このペンキ屋の倅!!」

傷痍軍人

九段　靖国の社
二等兵から大将まで　みんなが英霊にされて眠っている所
白衣の傷痍軍人よ　頭を下げることなく堂々と立て
この社はおまえたちのものだ
戦争で死んだ人々の
肉の苦しみと痛み
心の苦しみと痛み
掬いとろうとして掬いとれない程の量だから
国が英霊という言葉に封じ込め
猫の額ほどの敷地に押し込んだ
靖国神社という名の体制

死ななかったから　英霊にならなかったから
おまえたちは鳥居の下にみすぼらしくうずくまることだけを許されている
それが体制のおすそわけ、捨て扶持だ

傷痍軍人よ、堂々と立て
この社はおまえたちのものだ
打ち壊してもいい　踏み潰してもいい
酒を飲んでもいい　女を抱いてもいい
何をしようとかまわない
ここはおまえたちが腹の底から自由に振るまえる場所なんだ
そして
靖国神社にやってくる奴らに
はっきりとおまえたちの姿を見せてやれ
手がなく、足がなく、目がなく、耳がなく、鼻も口もない体と心を
これが国のために戦い
親のために戦い
妻や子供のために戦った男の姿なんだということを
大和の血ばかりか半島の血も流れているおまえたちの姿を
少しも恥じることなく、バカヤローどもに見せてやれ

戦後日本の遺産相続者は

40

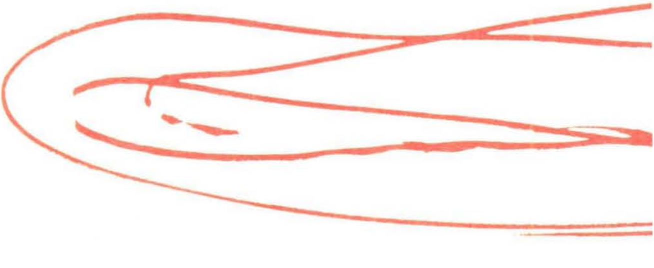
おまえたちなのだ
遺産横領を狙う仏顔(ほとけがお)した政治家の
甘い誘い言葉に迷うことなく
遺産はすべて自分たちのものだと
完璧(かんぺき)に自覚しろ

殉教者の陶酔もなく
反逆者の恍惚(こうこつ)もなく
ただひたすらに犠牲を払ったおまえたちこそ
選ばれた特権者なのだ
失われた右腕はジャングルで腐れ果て
失われた左脚はひからびた骨になって黄土の下に埋もれている
だから
責任を持って戦争を語れるのはおまえたちだけだ
戦争はいいものだといってもいいし
悪いといってもいいし
何といってもいい



それをいえるのはおまえたちだけだ
我々、戦後生まれの者には何もいうことはない
おまえたちの判断にすべてを任せる

だから
ひとつ本当のことを教えてくれませんか
実のところ、どうだったんでしょうか
我々はあなたたちに
何もいうことはありません
ただひとこと、教えてくれませんか、お願いですから
戦争というのは
いったい何なのでしょうか



82

風と光と

朝の海から何の変哲もない風が吹いてきます
君の髪を軽やかになぶっています
それは特別な風です
だってその風を僕が見ているんだから
それは特別な風です
だって君の髪を撫でているんだから
いま、風が僕たちの間に静止しています
時間が止まっています
僕は君の光るうなじを見る
僕は幸せになる
そして、考える
僕ら二人はこれからどうやって生きて行こうか

お願いですから
僕の彼女には、もう少し柔らかな光を与えて下さい

だって、彼女はいま、心に眠っているんですから
もし、不遠慮にギラつく光であぶり続けるなら
僕はお前を決して許さない
僕の世界は彼女のことで一杯なんだから
男にとって女を好きになることは
体を張ることなんだから
お願いします
柔らかな光を与えて下さい
このまま眠らせ続けて下さい

14

好きです

海の家で売っているラーメンやギョーザやカレーライスはまずい
でも、そんなものをひたすら食べている
あなたが好きです
ラーメンやギョーザやカレーライスがまずいと文句をいったって
始めからまずいのだから
まずいに決まっているんだから
つべこべいわないでしっかり口を動かす
あなたが好きです
始めからまずいものを買っておいて
「これはまずい」という必要はない
だから
まずいとわかっていながら
黙ってラーメンかギョーザかカレーライスを買って
何一つ文句をいうことなく
ただただ腹にしまい込む

あなたが大好きです



もう少し

海があって好きな女がいて
もうそれだけで充分だ
他になにもいらない
チリチリする日射しと潮の香り
サンオイルの匂いとガキの騒ぎ声
そして下衆な男たちの淫らな視線
でも
オレの横にはお前がいる
もうそれだけで充分だ

お前はこのとりとめのない海を素晴しい世界に変え
細胞のひとつひとつまでオレを幸せにするけれど
もう少し砂が奇麗だったら
もう少しお前の肌に当たる水が奇麗だったら
もっと幸せになれるのに

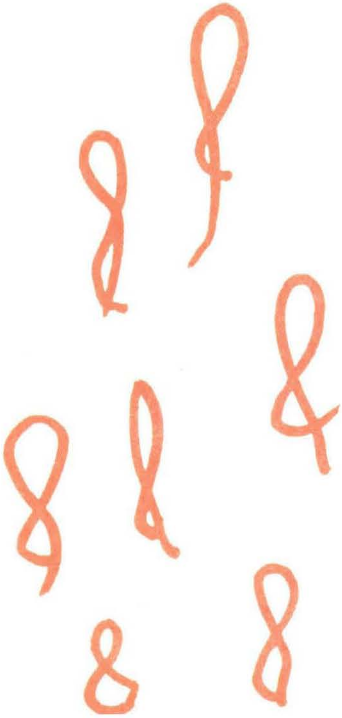
もう少し静かだったら
もう少しくだける波が澄んでいたら
もっともっとこの海が好きになれるのに
渚で遊ぶお前に小さな波が襲いかかる瞬間
オレの胸はドキッと痛んでしまう
もう少し
波が奇麗であればいいのに

感謝

山の緑が目にまぶしく光る
億兆京の樹々が夏の盛りをコーラスする
白い雲が大股に飛んで行き
海はいつまでもいつまでもキラキラ輝いている
白い浜辺には生まれたばかりの嬌声がこだます
海の水は、子どもの頃と変わらずにそこにあり
目に痛く喉に痛い
海に潜ると
一気にまるで違う世界に引き込まれたような恐ろしさと
そのまま海に溶け込んでしまいたい誘惑がある
海からあがった気だるい体を紫外線が射し貫き
パラソルの影にあわてて逃げ込むと
そこには笑顔のキミがいた
寝ころがって読む本の一ページ一ページが
自分の肉になりそうな気がする

喉を駆け下りるビールは
内臓をすみずみまではらい浄めてくれるような気がする
いまここではすべてのものが「イエス」といっている
そして、隣にはどこか遠くを見つめるキミがいる
あとまだ三日休みがある

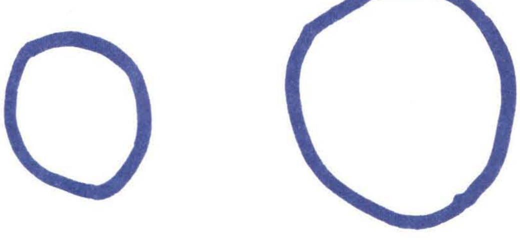
こんな世界を創（つく）ってくれた人は誰（だれ）なんでしょう
こんな世界を創ってくれたあなたに心から感謝します



恋すること

きっとあなたが現れるだろうと
二時間も三時間も改札口に立ち続けたり
通りすがりにあなたが与えてくれる
一瞬の微笑で一週間生きたりする
こちらのほうをチラッと見てくれた時
こちらを認めたか認めないか分らないけれど
確かにこちらを見てくれたという
その身振りだけで勇気づいてしまう
ああ、人を恋するなんて……

あなたが使い古した鉛筆だとか消しゴムだとか上履きだとか
あらゆるものが異常に価値あるものに思えたり
あなたの親たちがとても偉い人に見えたりする
言葉を発することがひどく難しいものだと初めて思い知ったり
どんなことであれ、あなたが一言（ひとこと）いってくれれば



全身全霊を込めて何でもやり遂げる自信が湧いてきたりする
ああ、人を恋するなんて……

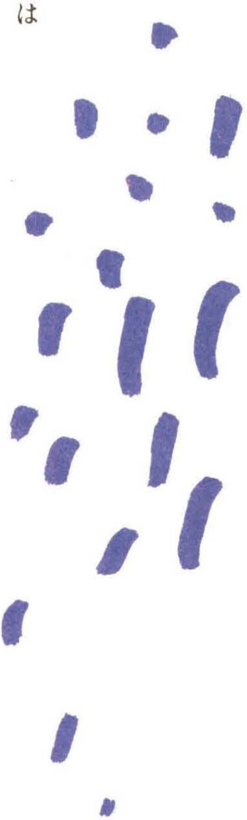
自分のすること一つ一つすべて
あなたの黄色い声で笑われているような気がする
でも、やっぱり、俺は下衆じゃないから腹を立てるつもりはない
けれど、それでいいんだというほどにはウジウジしていない
奪い取ろうとはできないけれど、引き下がるのもいやだ
ああ、人を恋するなんて……

顔をじっと見せ続けてくれ
どんなにすぐれた画家よりも
あなたを美しく描いてあげられる
けれど俺のほうを見て欲しくない
また一つ欠点を見つけられたくないから
俺はあなたのいいところだけを見る自信があるけれど
俺にはあなたに見せられるようなものが何もない、何もない

12

ああ、人を恋するなんて……

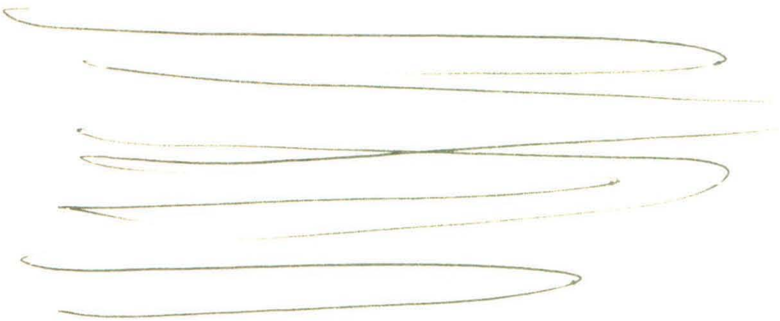
そういう俺に、一言
「好きです」
といってくれませんか
それで初めて別れる決心がつきます
だって、それが愛のセリフではないことは
充分わきまえていますから
たんなる同情であると思っています
でも、「好きです」といって下さい
あなたへの想(おも)いを断ち切ることができますから
だけど
「嫌いです」
といわれたら……



13

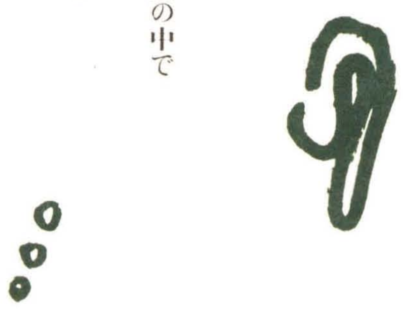
伊豆の海

海はとても小さかった
はっきりいって、下衆（げす）な海だった
オレはもっと大きな海が好きだ
大きな海は大きな幸せ
箱庭のような海は
「こんな程度でどうするんだ、このバカタレ」っていう海だった
でも、箱庭の海で泳いだり、バーベキューしたり
子どもに浮き袋を与えて砂浜で遊ばせているオヤジがいたり
小さな幸せを楽しむ人が集まっている
小さな海は小さな幸せ
波は淡々とちっちゃな岩の間に打ち寄せて
小さな幸せを洗っている
オレは遊泳禁止の海が好きだ
オレを激しく疎外する海がいい
異常に冷たく、異常に波が荒く





「一歩も近づくな」と厳命する海
最後のあがきのような波の中で
オレは海に挑んでいきたい
箱庭の海を洗う疲れ果てた波ではなく
オレを底に叩(たた)きつけ、粉々にしてしまう激しい波の中で
オレは初めて海の愛情を感じて安心する
オレに正面切って挑戦してくるヤツはいないのか



95

息子へ

ヨチヨチ歩きのお前の左手が
オレの掌(てのひら)の中にすっぽり収まっていた時
お前は恥ずかしそうにオレを見上げていたものだ
右手でマジンガーZを抱(かか)えながら

風呂上がりの火照(ほて)った体で
タオルを持った母の両腕の中に飛び込んでいった時
お前はケラケラと笑い転げていたものだ
お尻に水滴を光らせながら

オレに向けるお前のまなざしの中に
暗い敵意と激しい軽蔑がひそみ始めたのは
いくつの時からだったろうか
まわりの人たちから理由もなくいじめられることがあったのだろう
指さされて嘲笑(あざけ)られることが続いたのだろう

96

そして、オレの冷たい背中と涙を流す母の横顔を
見るともなく何度も見たに違いない
オレを怨んだり、軽蔑したり、怒ったり
「オマエなんか父親じゃない！　オマエなんか殺してやる！」
と血をたぎらせて思い決めたのだろう
怨みなさい、軽蔑しなさい、怒りなさい
それでいいのだ

ヒゲのはえた口元を硬直らせてお前はいう
「世の中　金じゃない、名声じゃない、コネじゃない、純粋な理想なのだ。
オマエのように理想を失った人間に何の意味があるのか」と
他人から聞きまくり、本を読みあさり
オレを弾劾する理屈と証拠を山のように用意するに違いない
ありあまる退屈な青春の時間の中で、お前は執拗にオレを攻撃するに違いない
それでいいのだ
攻撃しなさい、殺しなさい

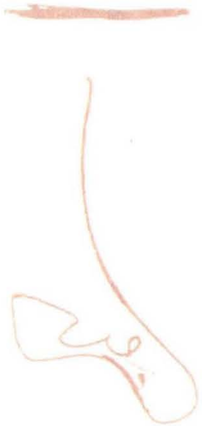
17

しかし、お前の脇腹（わきばら）に少し余分な肉がつき始める頃
それはオレが病院のベッドにしばりつけられている時かも知れない
ガンで死にかけている時かも知れない
あるいはもうすでに墓石の下にいる時かも知れない
しかし、いつかは
「ぼくの父は、ぼくの父として偉かったし、許せる男だった」
と、お前は思うだろう、きっと

いくらでもオレを軽蔑し、怨んでもいい
でも、お前が一生、死ぬ最後の時までオレを軽蔑し、怨み続けたとしたら
お前は、たんなるとんでもないバカである
オレを許せる男（ひと）だとお前が思った時
その時、お前は初めて大人になるのだ

息子よ！
お前は、きっと大人になるはずだ
オレは確信している

なぜなら、お前は私の息子(せがれ)なのだから



あとがきに代えて

インチキ芝居の緞帳（どんちょう）あげて
大見得切って躍らせる
浮いた時代の人生は
舵（かじ）の利（き）かない帆掛け船
愛につまずき
自分に泣いて
時の流れに身をまかす
走る時代の歯車なれど
死に場所捜して生きるもよし
なんのあてなき人生なれど
人にかくれて生きるもよし
強く生きよと母の声
死ねと教えし父の顔

右の最後の詩もそうだが、書き上がったものを読み返してみると、すべて、

一〇代後半から二〇代前半にかけての感覚の世界だという気がする。

いま、もう四十歳近くになって、本当は違うな、と思うところがちょくちょくあるにはある。

でも、どうも、この感覚が自分の一生を左右しているようだし、いまでも強く引っかかっているのを感じる。だから、あえて『KID RETURN——キッド リターン』というタイトルをつけた。

神や宇宙についてのくだりを、神なんて結局は現世利益じゃないかとくさされてしまえばそれまでだけれど、かつてもいまもこの本の言葉通りに思っているところが確かにあるのだ。

一〇代後半や二〇代前半に神について考えたことが、女についても同じことだが、この年齢になっても、やはり自分の本質的な部分、幹であることに変わりがないとつくづく思う。

もうひとつ。

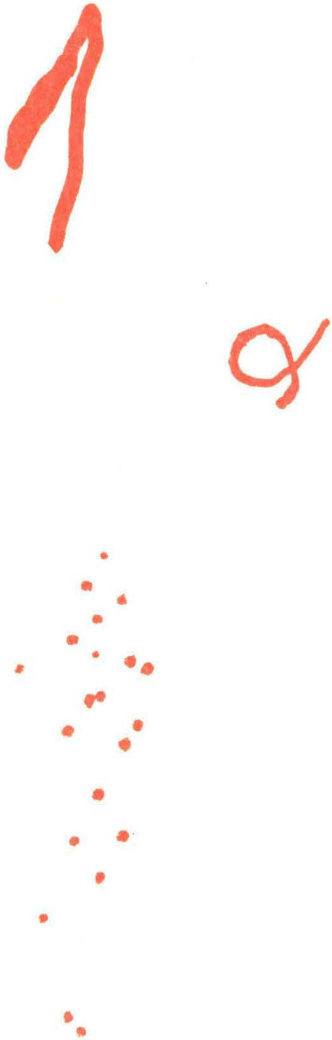
最終的に、自分の最高のファンは自分自身である、ということ。自分のスポンサーであり、ファンであり、恋人であるのは自分であると自覚したほうがいいのではないか。

自分を一番素敵に思える人というのはやっぱり自分であって、だからこそ、

他人に対しても素敵に振る舞おうと努力するのだし、イヤな自分を見たくないと思えるのではないか。

一九八六年一一月

著者





KID RETURN

一九八六年一一月二七日　印刷
一九八六年十二月八日第一刷発行
著者　ビートたけし
発行者　高瀬幸途
発行所　株式会社太田出版
東京都新宿区四谷三―一三水喜ビル
電話03―三五九―六二六二
振替　東京二―一六二一六六
印刷製本　神谷印刷株式会社
定価　一、〇〇〇円

ISBN4-900416-16-9 C0092 ¥1000E

訂正

72ページ　1行目・80ページ　5行目

P80 P72

〈誤〉　　　　　　〈正〉

見せるものは　↓　見えるものは

完璧（かんぺき）に自覚しろ　↓　完璧（かんぺき）に自覚しろ

右訂正し、不手際をお詫び申します。



ISBN4-900416-16-9 C0092 ¥1000E 定価1,000円